

1 次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

私たちは「言葉」を用いて認識・思考し、自分の意思を伝達します。身振りや態度なども「言語」として扱われます。このように、私たちの認識や思考が、「言葉」の枠内のみで行われることを、「言語の専制」と呼ぶ場合もあります。つまり、私たちは自由に認識し思考しているつもりですが、実は「言葉」という制度にとらわれているというわけです。言葉の機能の中心に「分類」があります。これは、言葉は「私たちが知覚したものを分類する」ために用いられるという意味です。しかしこの分類が、自由に行われることはありません。⑦、それは「あらかじめ存在する何らかの概念の中に当てはめていく」という方向で行われるのが普通だからです。

このことをもう少し説明してみますが、その前に、まず以下の質問を考えてみてください。

次の中で仲間はずれのもの一つだけ探し出さないさい。

- A アリ B クモ C チョウ D トンボ

もちろん答えは「クモ」です。クモは足が八本ある節足動物で「クモ類」に属します。これらの生物を分類する方法自体は無限に存在します。たとえば「飛ぶか飛ばないか」「三つの文字で構成されているか否か」などです。「一つだけ」ということなら、たとえば、アリのみが「群居性」であるということから、「アリ」を選ぶことも可能です。

何かを分類するための基準は、実は無限に存在します。しかし私たちは、それらのうちから恣意的(勝手)に、ある種の「基準」のみを選び出し、それによって「分類」を行います。そして、「正解とされる分類」というのは、それが「社会において重要度が高いとされている基準である」ということによって裏打ちされているだけです。つまり、私たちが何かを学ぶということは、社会において重要とされている分類基準を自分のものとするということを意味しています。

そしてこのとき私たちは、少しだけ「自分を殺す」ことになりました。それが「大人になる」ということ、「社会化する」ということです。しかしこのとき忘れてはならないのは、「どのような分類基準であれ、本来は等しい価値しかもっていないはずだ」ということです。「本来的な正しさ」はそこには存在しません。

私たちは言葉という道具を用いて、世界を「切り取って」認識します。また、私たちは世界だけではなく、自分自身さえ言葉によって認識します。そして、そのとき私たちが使用する言葉という道具は、ある文化において形成されてきたものです。言葉のもつそのような側面を「ドグマ性」といいます。「ドグマ」とは、「教条」などと訳される概念であり、私たちが無根拠かつ強固に信じている「認識の枠組み」のことを指します。私たちは「ドグマ」から(純粹な意味で)自由になることはできません。私たちがその「ドグマ」から自由になるためには、言葉のもつドグマ性を認識し、それを所有することを目指すほかはないということです。

私たちは、社会の側に存在する分類基準を無視するわけにはいきません。人間は群居性の動物であり、共同体をつくって生活する生き物です。社会の側の分類基準を自分のものとするのはとても重要なことです。なぜなら、そうすることによって、私たちは会話ができますし、意思疎通がより簡単になるからです。しかし、「他の人たちが考えるように考える」ことはとても重要である反面、「他の人たちが考えるようにしか考えられない」という状況を発生させてしまっています。そのとき人は「言葉による束縛」、もしくは「言語の専制」を実感します。そうならないためにも、社会の側の分類基準は便宜的なものでしかないということを、しっかりと把握しておく必要があります。

そして私たちは、できるだけ自分を殺さずに、社会の側の分類基準とうまくやっていかななくてはなりません。そのとき重要なのは、「言葉の世界の主人は自分である」という意識をもち続けることです。言葉は意思伝達の道具であり、認識の道具であり、思考の道具です。

言語が「伝達」の手段であるとき、私たちは社会の側の分類基準に従わなくてはなりません。しかし言語が「認識や思考」の手段であるとき、私たちはそれに必ずしも従う必要はありません。自由に認識し、思考してよいはずですが、しかし、実のところそれは、それほど容易なことではありません。(出典 高田明典『「私」のための現代思想』)

① ⑦に入れるのに適当な接続詞を書きなさい。

② 「その……ください」とあるが、この質問を考えさせる意図は何か。その説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 分類基準の話題を提示し、人間の群居性について注目させるため。
(2) 分類基準は、無限にある中からの恣意的な選択結果だと示すため。
(3) あらかじめ分類基準が存在する、ということに反論するため。
(4) 無限に存在する分類基準について、正しい選択方法を述べるため。

③ 「社会化する」とあるが、なぜこのような言い方をするのか。それを説明した次の文の⑧・⑨に入る適当なことを、⑩は二字で、⑪は十字以内で、文章の中から抜き出して書きなさい。

何かを学ぶということは、⑫の判断を抑え、⑬を受け入れることだから。

④ 「私たちは……いきません」とあるが、それはなぜか。三十五字以内で書きなさい。

⑤ 「そのとき……ことです」とあるが、筆者はなぜそのように言うのか。七十五字以内で書きなさい。

⑥ 「それは……ありません」とあるが、その理由を説明したものとして最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。

- (1) 私たちの使う言葉は、絶対的な根拠に基づく認識の枠組みだから。
(2) 自由な認識や思考をどれほどしても、他の人には伝達できないから。
(3) 認識や思考は、文化の中で作られた言葉の枠内でのみ行われるから。
(4) 私たちは社会の中で生活するので、自由より協調性が重要だから。

2

次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。

山路来て何やらゆかしすみれ草 芭蕉
秋の燈やゆかしき奈良の道具市 蕪村

いずれも、ぼくにとつて忘れがたい句だ。両俳人とも心に「ゆかし」と感じ入った嘯目の景をそのまま素直にそう表現している。じつさい、山路をたどつてきて、ふと目を落としたとき、紫の小さな花を可憐に支えている葦は、なんとも「ゆかし」く思われるし、傍らにもした秋の灯を受けて道具市の品々が柔らかに光っている風情は、コト・奈良という土地柄だけに、まことに「ゆかしき」さまに見えてくる。「ゆかし」は本来は「行く」に由来する。つまり、行かま欲し、行つてみたい、という意からつくられた語である。そこから、何となく知りたい、見たい、聞きたい、と興が持たれる心のさまを表す言葉となった。しかし、それはギリギリした好奇の目ではなく、見るにしても、さりげなく、よそ目ながらに視線を投げる、そのような余裕を持った、あるいは抑制のきいた姿勢が前提となっている。そして、このようなゆとりある態度こそが、そうした美の発見につながっているのである。

『徒然草』で兼好が「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものか」とシルしているのは、まさしくこの「ゆかしい」心の持ち方であろう。月を見るといえば一点の雲もない満月、花を愛でるなら満開の桜、それ以外に目が向かない、というのは、何と味気ない観賞の仕方であろうか、と彼はいい、雨の降る夜にかくれている月を想い、満開の花より、これから咲こうとしている梢を仰いだりして興じるほうが、ずっと趣深い、すなわち「ゆかしい」ではないか、と。

中国、明の詩人高啓にも、それと心根を二にするような詩がある。「胡隱君を尋ぬ」、隠士の胡君を訪ねる、という作だ。

水を渡り復た水を渡り 花を看還た花を看る
春風江上の路 覚えず君が家に到る

高啓は江南の蘇州近郊に隠棲し、花の時期、堤をサンサクしながら友人を尋ねたのである。彼にとつては、友を訪うことさえ、さげない目標だった。まして花を眺め、春水を幾筋も渡ることなど全く

慮外であったのだろう。それでいて、この詩人は春風に吹かれながら心ゆくまで花と水を見きわめ、あげく、知らぬ間に友に家に着いてしまったというのだ。これこそ「ゆかしき」堤上の道ではなからうか。花は桃か、李か、あるいは梅か。ぼくは「風流」ここに極まっているような気がする。(出典 森本哲郎「失われた『ゆかしき』」(注) 囁目の景―目に触れる景色。隠士―世間を離れて隠れ棲んでいる人。

- ① ――の部分⑦、⑧、⑨を漢字に直して楷書で書きなさい。
- ② 芭蕉の句はどの語の後に意味の切れ目があるか。一語で書きなさい。
- ③ 「そうした美」を表す熟語を、それ以前の文章中の語で書きなさい。
- ④ 「この『ゆかしい』心の持ち方」とはどのような「心の持ち方」を指すか。それを示す部分の初めと終わりの三字をそれぞれ書きなさい。
- ⑤ ⑦・⑧に当てはまる適切な平仮名一字をそれぞれ書きなさい。
- ⑥ 「ぼくは……する」の理由を説明した次の文で、①には漢詩の一節を、②には五字以内の文章中のことは抜き出して書きなさい。

高啓の③態度は「ゆかしき」の体现であるから。

3

次の文章を読んで、①〜⑥に答えなさい。

三ツ木高校を目指す受験生の「私(杏)」は、自分と似た感性の真由子に惹かれて友達になったが、親友の美香に泣かれてつきあいをやめた。以後、勉強に励みつつも真由子のことが気にかかっていた。ある日、「私」はふと思いついて図書館に向かった。

カウンターの中で、返却本の整理をしていた母が、あらつというふうな目を留めた。でも、何も言わなかった。母がここに勤めるようになってから、私が足を踏み入れるのは初めてだった。母はここでも仕事をしているようだった。親が勉強しろってうるさいと樹里はばやく、私の両親は宿題をやったかとさえ聞かない人たちだ。

文庫本の棚を漫然と眺めていると、いきなり背後で声が出た。「これ、読んだ?」

びくつとして振り返る。はじかれたような、おおげさな動きになってしまった。これまで、本についてあれこれ話した相手はたった一人だけ。――あの本読んだ?これ、面白いよ……。

でも、ここに、真由子がいるはずがない。「そんなに驚くことないでしょ」後ろに立っていたのは母だった。

「……お母さん」

『黄色い髪』。なかなか面白いわよ。ずいぶん前の小説だけれどね。空色のエプロンをした母は、やはり家で見ると少し印象が違う。何が違うのかはわからないけれど。言われるままに、干刈あがたの『黄色い髪』を借りてみた。母の薦めで本を読むのは初めてかもしれない。「普通はさ、今の時期、本なんか読んでないで勉強しろ、って言うんじゃない?普通の親なら」

「普通の親ねえ。私はべつに普通でない親でもかまわないわよ」母の口調は、あつさりとしたものだった。夕飯の時、図書館で見た母の印象を語ると、「当たり前よ」と母は言った。

同じエプロン姿でも、キッチンに立つ母は、どことなくのんびりとしている。働いて金を得るのは、責任と緊張が伴うものだと母は言う。「家だって責任とかあるでしょ」

「責任の種類が違うでしょ。家庭はくつろぐところだもの」娘である私と真顔で話すことに、少し照れたように母は口元だけで笑った。

気持ちがあつたりとできてこそその家。そういうえば、私は何のかんのかといつても、ずっと家の中ではくつろいでいたのかもしれない。いじめることにもいじめられることにも無縁だったが、小さなトラブルや仲違いがなかったわけではない。そんな時でも、家に帰ればほつとで

きた。何も話さなくても何も聞かれなくても、家の中では安心できた。あれは小学校三年の時だった。仲のよかった友だちとささいなことだけでけんかした。単なる言葉のやりとりからこじれ、相手の子を泣かしてしまった。泣くことがいつだって同級生たちに受け入れられるわけではないけれど、あの時は泣いた者が勝ちだった。私は悪者になり、それでも絶対に泣くものかと、ふくれっ面のまま家に帰った。母はコーヒーを飲んでくれた。「杏もコーヒー、飲む?」

学校のことなどいっさい聞かずに、いきなりそう言った。コーヒーは大人の飲み物で苦いもの。そう思っていた。でも私はこっくりと頷いた。母はさらさらした濃い茶色の粉をドリッパーに入れ、お湯を注いだ。独特の香りが漂う。思えばあの時の香りに私は魅せられたのかもしれない。びろん、母はたつぷりのミルクと砂糖を入れることを忘れなかった。「ちよっぴり、大人になった気分でしょ」

自分はブラックコーヒーを飲みながら母が言い、私はコーヒーもけつこう美味しいと思つたものだった。それが、コーヒーというよりは、コーヒー入りのミルクとでもいうべきものであったことも知らずに。私と母、二人分のコーヒーを淹れる。少しだけ湯を注ぐと、湿った粉からふわっと芳香が漂い、鼻腔を突き抜けて独特の香りが空気に溶けていった。しばらく間をおいて湯を注ぎ足す。ぼとりぼとりとコーヒーがポットの中に落ちていく。

なぜ、急にあんな昔のことを思い出したのだろう。私たちの仲違いは、二、三日もすれば霧消してしまうようなささいなものだったはずだ。けれどあの時から、私はコーヒー好きになった。そして中学生になってからは、コーヒーを淹れるのは私の役目になった。

私の両親は、どちらかといえば「した人間で、よくいえば子どもである私に対して自由を認めている、悪くいえば放任主義、というのが親に対する印象だった。親は私にあまり関心がないのかもしれないと思うことさえあった。けれど、確かに、家にはくつろぎがあった。」三ツ木はなかなかいい高校みたいね」

母が、ふと思いついたというような口調で言った。(出典 濱野京子「その角を曲がれば」)

- ① ――の部分⑦、⑧、⑨の漢字の読みを書きなさい。
- ② 文章中の二つの⑦に当てはまる語として最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。
- (1) 堂々と (2) 黙々と (3) 淡々と (4) 楽々と
- ③ 「……お母さん」ということはからうかがえる「私」の様子を説明したものとして最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。
- (1) だしぬけに背後から声をかけられて非常に驚き、恐る恐る振り返ってみたところ母だったので、安心して居る。
- (2) 背後からの唐突なことばに、真由子かと思つて一瞬心が騒いだものの、母とは思わなかったで、意外に感じている。
- (3) ぼんやりと本を見ていたので、母の声ともわからず、真由子と勘違いしてしまったことに気づいて、とっさに取り繕っている。
- (4) 嫌なことを忘れようと一生懸命本を探していたのに、声をかけられて真由子を出してしまい、不機嫌になっている。
- ④ 「あれは……だった」から始まる回想の場面について説明したものとして適当でないのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。
- (1) 母のことばによつて想起した思い出を、今の視点で描いている。
- (2) 当時は気づかなかつたが、何も聞かないのも母の気遣いだった。
- (3) 「こっくりと頷いた」は母の薦めるまま本を借りた部分に重なる。
- (4) 「杏」が二人分のコーヒーを淹れる様子を客観的に表現している。
- ⑤ 「三ツ木は……みたいね」とあるが、このことばを聞いた時の「私」は、母をどう思っていると考えられるか。……の部分に注目してわかりやすく説明せよ。
- ⑥ この文章からうかがえる「私(杏)」という人物についての説明として最も適当なのは、(1)〜(4)のうちではどれですか。
- (1) 柔軟で偏らない見方ができる。 (2) 天衣無縫で屈託がない。
- (3) 控え目だが大人ぶっている。 (4) 負けず嫌いだ涙もろい。